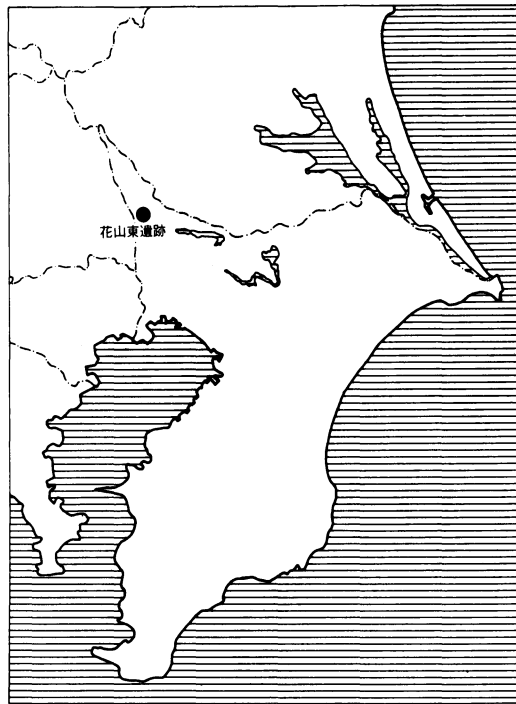


流山市花山東遺跡

——流山郵便局庁舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書——



平成8年9月

郵政省関東郵政局

財団法人千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第294集として、郵政省関東郵政局の流山郵便局庁舎新築事業に伴って実施した流山市花山東遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代後期の良好な資料が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また、郷土の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年9月30日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村好成

目 次

I	はじめに	2
II	遺跡の位置と環境	2
III	検出した遺構・遺物	5
1	基本層序	5
2	旧石器時代	5
3	縄文時代	6
4	古墳時代以降	11
IV	まとめ	11

挿図・図版目次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	3
第2図	遺跡地形図	4
第3図	遺構配置図	4
第4図	基本層序	5
第5図	旧石器時代石器	5
第6図	1・2号陥穴・3号土坑	7
第7図	4号炉跡	8
第8図	縄文土器	9
第9図	縄文時代石器	10
第10図	小形土器	11
図版1	1.遺跡全景 2.1号陥穴 3.2号陥穴 4.4号炉跡 5.縄文土器(1)出土状況	
図版2	出土遺物(1)	
図版3	出土遺物(2)	

凡 例

- 1 本書は、関東郵政局による流山郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市西初石4丁目1,423-1に所在する花山東遺跡(遺跡コード220-020)である。
はなやまひがし
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、関東郵政局の委託を受け、財団法人 千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、印西調査事務所長 谷 旬の指導のもと、主任技師 糸川道行が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成8年1月5日～平成8年2月15日
整理作業 平成8年2月16日～平成8年2月29日
- 5 本書の執筆・編集は、主任技師 糸川道行を中心に、印西調査事務所職員が共同して行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県生涯学習部文化課、関東郵政局、流山郵便局、流山市教育委員会、中山吉秀氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図 (NI-54-25-1-2)
第2図 流山市役所発行 1/2,500都市計画図 (流山11)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

I はじめに

平成6年11月、郵政省関東郵政局は流山郵便局新庁舎建設の計画に伴って、当該地区の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて県教育委員会に照会した。県教育委員会は市教育委員会の協力を得て試掘を行い、遺跡が所在する旨回答した。

その取扱いについて照会地全域を記録保存することで協議が整い、平成8年1月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。協議の結果を受けて、平成7年8月末に県教育委員会文化課・当文化財センター及び事業者の三者で現地踏査を実施したが、調査地は広大な雑木林であり、また周辺には家屋も多いため、事前に伐採や騒音防止対策をするよう依頼した。

発掘作業は1月5日より開始し、まず、トレンチ法による上層確認調査と同時に、市教育委員会で行った試掘の際に検出された「焼土を含む浅い土坑」の確認に努めた。その結果指摘された位置より若干東側で炉跡を発見したが、ほかには土坑3基が散見されたに過ぎなかったため、遺構の周辺を拡張精査して上層の調査を終了した。下層の確認調査も平行して実施したが、石器の単独出土地点2か所を拡張して広がり認められないことを確認し、2月15日にすべての現地作業を終了した。

II 遺跡の位置と環境

流山市は江戸川左岸に面し、その市域は南北に細長い台地上に発展してきた。眼下には江戸川本流によって形成された氾濫原が広がり、そこにいくつかの小河川が流れ込んでいる。

昭和60年度に行った遺跡分布調査¹⁾の結果、流山市内には200か所近い遺跡が所在することが確認された。中でも縄文時代の貝塚や集落、遺物散布地は130か所ほど知られている。これらの遺跡の多くは、江戸川の氾濫や、その支流によって複雑に解析された舌状台地上や流域の谷頭などに占地し、江戸川から東に離れるに従い規模も小さくなり、分布状況も散漫となる傾向がある。下花輪支谷は、北千葉浄水場のあたりで開口する解析谷である。上新宿付近を谷頭として南に流れ、二・三の小支流を集めながら江戸川へと向かう。長さは2 kmほどしかないが、両岸には有名な貝塚が数多く見られる。

花山東遺跡は、この支谷の中ほどの、江戸川から2 kmほど東に位置しており、ちょうど遺跡の分布が薄くなりつつある西境にあたる。ここでは、本遺跡に関連する縄文時代の周辺遺跡の分布状況から、その歴史的環境について概要を述べてみたい。

流山市における縄文時代の貝塚は15か所ほど見つかっている。その多くは発掘調査などにより時期や遺跡の性格が解明され、その成果は報告²⁾されていて、広く一般に知られているところである。特に大規模な環状貝塚で有名な上新宿貝塚(6)と上貝塚貝塚(7)は共に下花輪支谷に面している。

上新宿貝塚は谷頭に位置し、平成6年度には県内主要貝塚調査の一環として貝層の限界確認調査が行われた。その結果、径150mの間に南北に向かい合った貝層が確認され、南貝層は加曽利B式期から海水産の貝層が形成され始めたことが確認された。北貝層は汽水産の貝層の中から安行3式土器が多量に出土した。

上貝塚貝塚は支谷のほぼ中間西岸にあり、平成元年度に道路建設に伴い貝層の一部が調査された。その結果、60余基の土坑のほとんどが後期称名寺式期に属し、当時の墓域の一端が明らかになるとともに堀の内式期の柄鏡形住居跡など注目される遺構が検出された。また、同時に調査された三輪野山第II遺跡(9)は

古墳時代後期の大集落であるが、前期黒浜式期の住居跡もある。

本遺跡近辺を見ると、西初石桜窪遺跡(2)・西初石3丁目遺跡(3)では、黒浜期を主体とする住居跡や期末の炉穴が、桐ヶ谷新田遺跡(4)では、中期加曽利E式期の住居跡が検出されているが、いずれも小規模で、上記の遺跡との性格の違いは歴然としている。

このほかにも、南方1.5kmにある三輪野山貝塚(10)や、北方2.3kmの中野久木谷頭遺跡などの調査が実施され³⁾ている。

注1 (財)千葉県文化財センター 1985 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区―』

2 第1図の遺跡については、主な参考文献として下記のものがある。

2 流山市教育委員会 1980 『西深井一ノ割遺跡・西初石桜窪遺跡』

3 西初石3丁目遺跡調査会 1981 『流山市西初石3丁目遺跡』

4 桐ヶ谷新田遺跡調査会 1979 『桐ヶ谷新田遺跡』

5 (財)千葉県文化財センター 1986 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V』

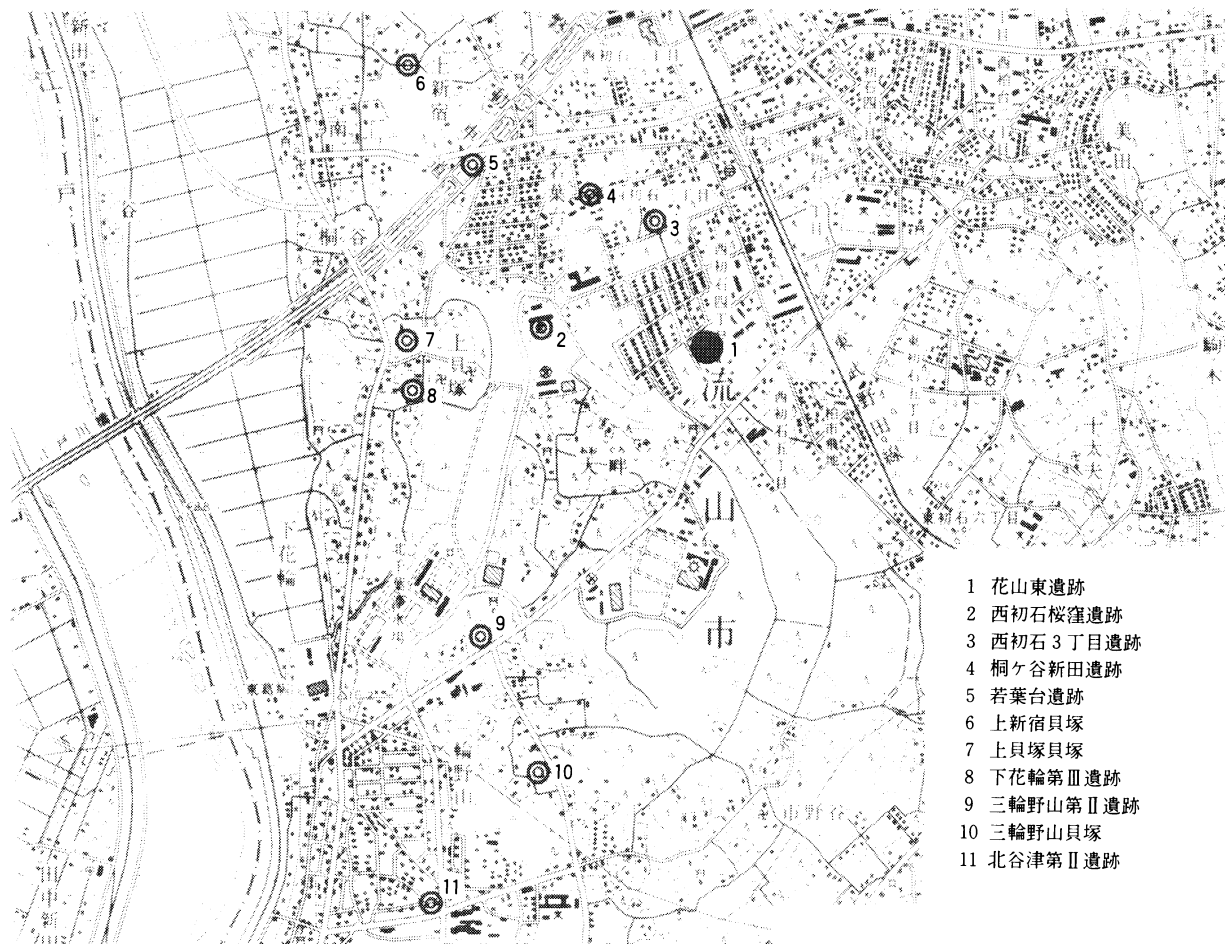
6 千葉県教育委員会 1995 『流山市上新宿貝塚発掘調査報告書』

7・8・9 (財)千葉県文化財センター 1996 『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』

10 流山市教育委員会 1989 『三輪野山遺跡群』

11 流山市教育委員会 1989 『加地区遺跡群』

3 平成7年度に、三輪野山貝塚は(財)千葉県文化財センターが、中野久木谷頭遺跡は流山市教育委員会が発掘調査を実施している。

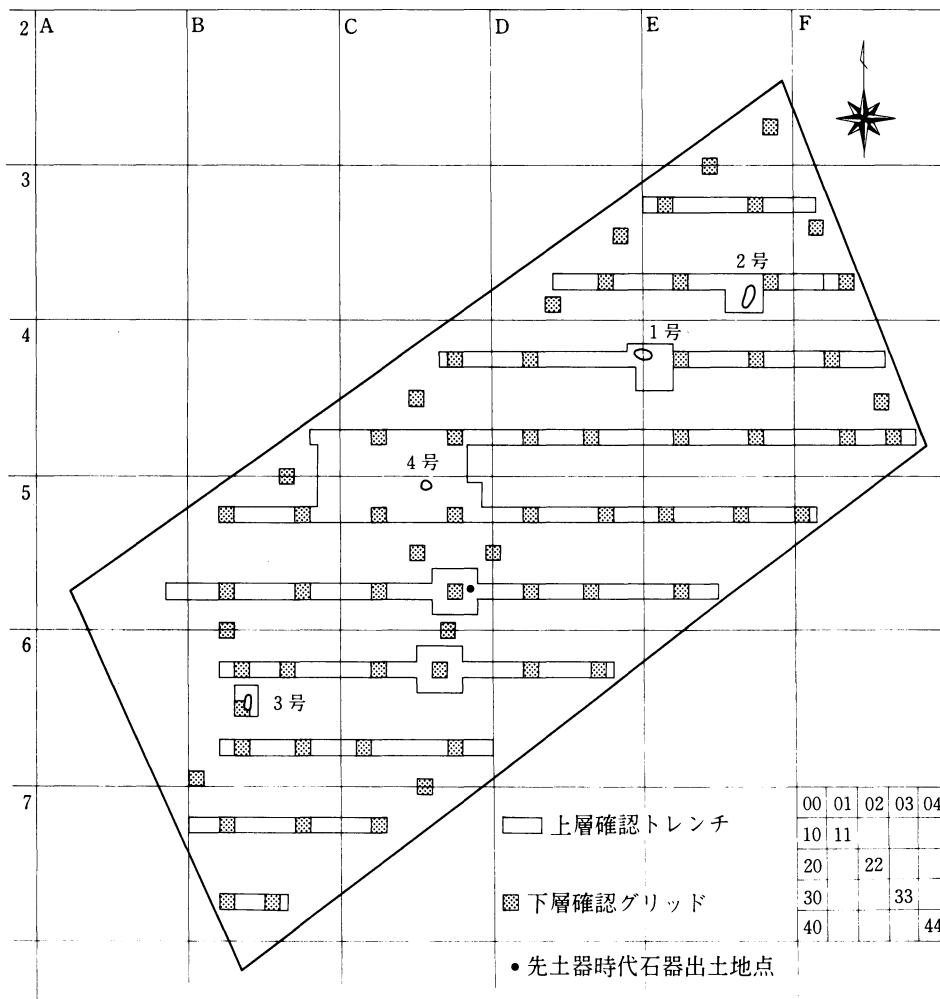


第1図 遺跡の位置と周辺遺跡



第2図 遺跡地形図

(S=1/2,500)



第3図 遺構配置図

(S=1/1,000)

調査区中央の5 D-00グリッド (以下 Gr.) の座標は、
 $X = -13840.000m$
 $Y = 7800.000m$
 $GH = 19.540m$
 大Gr.は20m四方とし、北南を1-7、西東をA-Fと呼ぶ。大Gr.内を4mメッシュに分割し、北西隅から東に00-04、2段目を10-14とする。

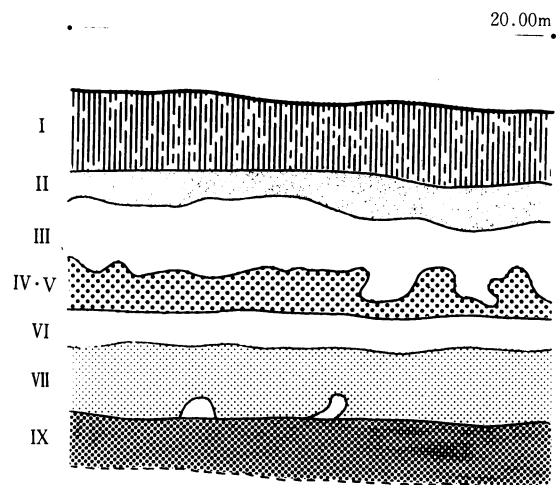
III 検出した遺構・遺物

調査対象区域は幅52m、長さ115mの長方形で、面積は5,837㎡である。検出した遺構は、縄文時代陥穴2基、炉跡1基及び時期不詳の土坑1基である。いずれも対象区域の中央に北東から南西にかけて一直線に並び、1号陥穴の北東15mに2号陥穴が、南西30mに4号炉跡がある。

出土した遺物には先土器時代石器・礫3点、縄文時代土器65点・石器4点と市教育委員会の試掘の際に発見された土器1点がある。なお、縄文時代遺物の7割は、4号炉跡を中心とした4 CGr.南部から5 CGr.にかけて出土している。

1. 基本層序 (第4図)

5 C-34Gr.で土層の観察記録を行った。標高はほぼ20mである。表土のI層は40cmほどで、その下位に縄文時代包含層のII層が15cmから20cmの厚さで見られた。この箇所ではII層中の新規テフラ層は確認できなかった。III層はソフトローム層で、平均20cmの厚さであった。その下部は入り組みながらハードローム層へと移る。ハードローム最上端はIV・V層で平均20cmの厚さである。V層は第1黒色帯であるが、あまり黒さが明瞭ではなく、IV層と区別できない。次はVI層のAT(始良丹沢パミス)層で10cmほどの厚さである。次いでVII層で30cm弱の厚さがある。そしてIX層の第2黒色帯へと続く。VII層とIX層の間にブロック状のVIII層が部分的に見られる。



第4図 基本層序 (5C-34Gr.)
(S=1/30)

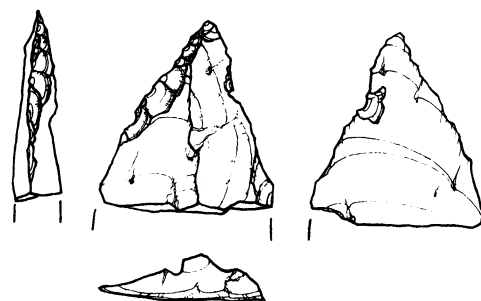
2. 旧石器時代

(1) 遺物 (第5図)

黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。第1黒色帯上部付近からの出土である。

先端部のみ遺存しており、調整は先端部付近の左側縁部に対し主要剥離面から施され、素材剥片の末端部の形状を整える程度で終了している。長さ2.47cm、幅2.26cm、厚さ0.62cm、重さ2.42gを測る。

主要剥離面の剥離の方向と正面図左側縁に見られる剥離の方向は一致するが、その他の部位の剥離面は節理面と同一であるため、剥片剥離作業が行われた当時の剥離の方向が理解できない。このため結果として縦長剥片を素材としているのか、石器素材剥片の形状を意図的に縦長剥片と設定して剥片剥離を行っていたのかは明確ではない。



第5図 旧石器時代石器
(S=1/1)

3. 縄文時代

(1) 遺構 (第6・7図 図版1)

1号陥穴 4D-14Gr.から4E-10Gr.にかけて検出された。現状では、上面で長軸205cm、短軸120cmの長楕円形を呈し、底面は長さ160cm、幅15cmほどの溝状となる。長軸の方位はN-74°-Wを示す。底に近くに従って葉研状に狭まっているため、深さ180cmまでしか発掘できていないが、ボーリングテストの結果では、さらに西側で25cm、東側では40cmほど下がる。西壁面は75°の勾配を保って一直線に下降し、東壁では、中段が張り出す。

埋没土は5層に分かれる。1層 黒褐色土(少量のソフトロームを含む)、2層 暗褐色土(ソフトロームを含み、壁際はローム粒が多い)、3層 黄褐色土(ローム粒・ローム塊を主とする)、4層 黄褐色土(3層に少量の黒色土を含む)、5層 暗黄褐色土(ローム塊を主として、黒色土を含む)である。

3層以下は肌理の粗い土壌で、特に下層ほどしまりがなく、一気に埋没した様子が窺える。その後は徐々に埋没したと考えられる。

遺物は出土していない。

2号陥穴 3E-43Gr.に検出された。西側は攪乱を受けているが上面で長軸260cm、短軸120cmの長楕円形、底面は150cm×60cmの長方形を呈すると思われる。長軸の方位はN-38°-Wを示す。深さは125cmで、壁面は上方でロート状に開き、底面は堅さに乏しく、やや凹凸がある。

埋没土は5層に分かれる。1層 暗黄褐色土(ソフトロームを主とし、暗褐色土を含む)、2層 暗褐色土(ソフトロームを含む)、3層 黒褐色土(少量のロームを含む)、4層 暗黄褐色土(ソフトロームを主とする)、5層 黄褐色土(ローム塊を主とし、少量の黒色土を含む)である。

遺物は出土していない。

3号土坑 6B-12Gr.を中心に検出された。上面で不整楕円形を呈し、最大長220cm、同幅115cmを測る。深さはほぼ60cmで、南端の部分にさらに深さ20cmの円形ピットが認められる。

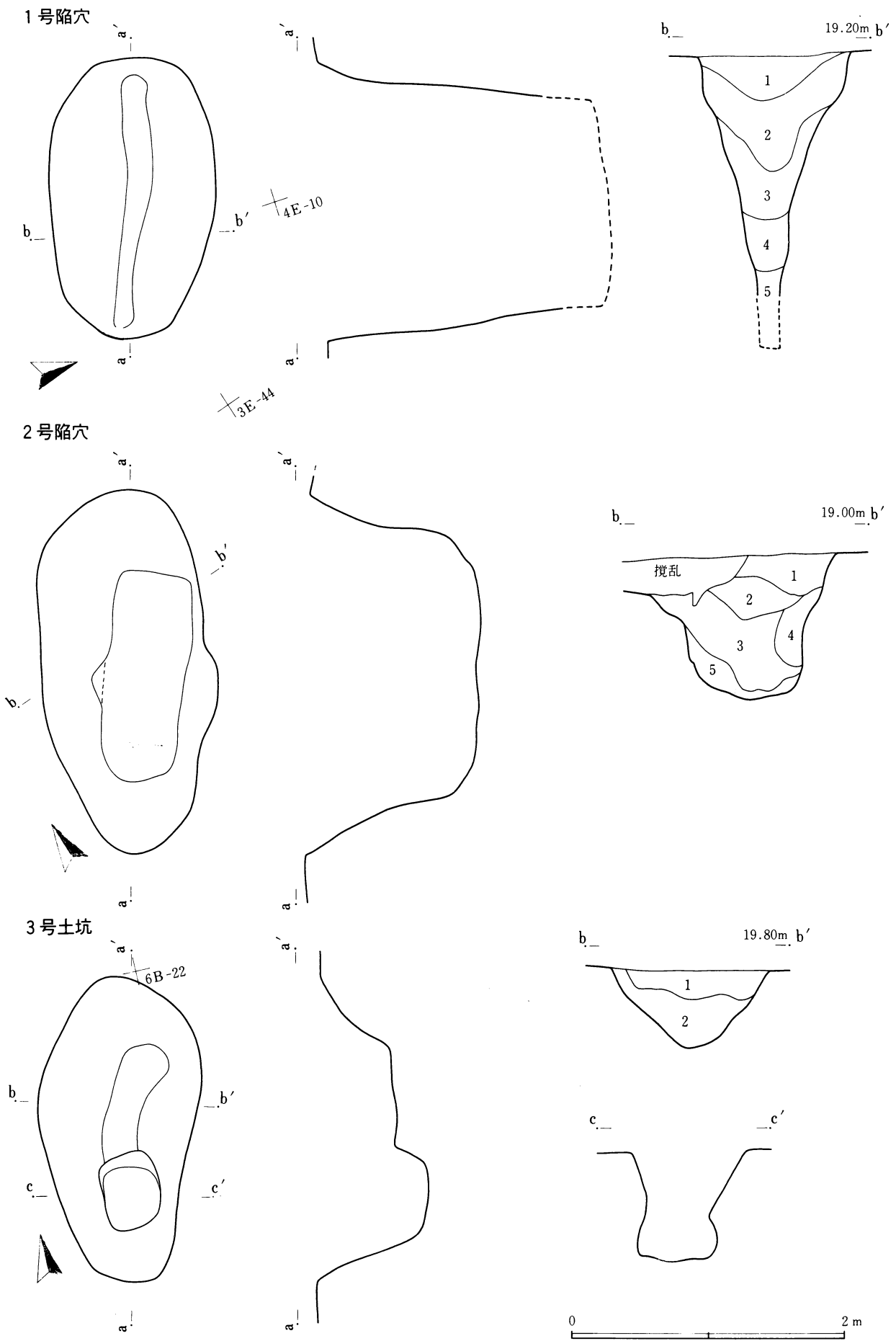
埋没土は、1層 黒褐色土(ソフトロームを若干含む)、2層 暗黄褐色土(ソフトロームを主とし、黒色土を若干含む)である。

4号炉跡 5C-02Gr.から03Gr.にかけて検出された。確認面での規模は、南北155cm、東西150cmの不整形の皿状の窪みであるが、底面北部分が柄状に突出している様子から、北側に焚口をもつ炉と考えられる。底面までの深さは10cmから12cmで、火床部分に向けて低くなる。火床は南側に遍在し、60cm×40cmの範囲に認められる。火床の中心部には、径10cm、深さ10cmのピットが火床を掘り抜いて穿たれている。

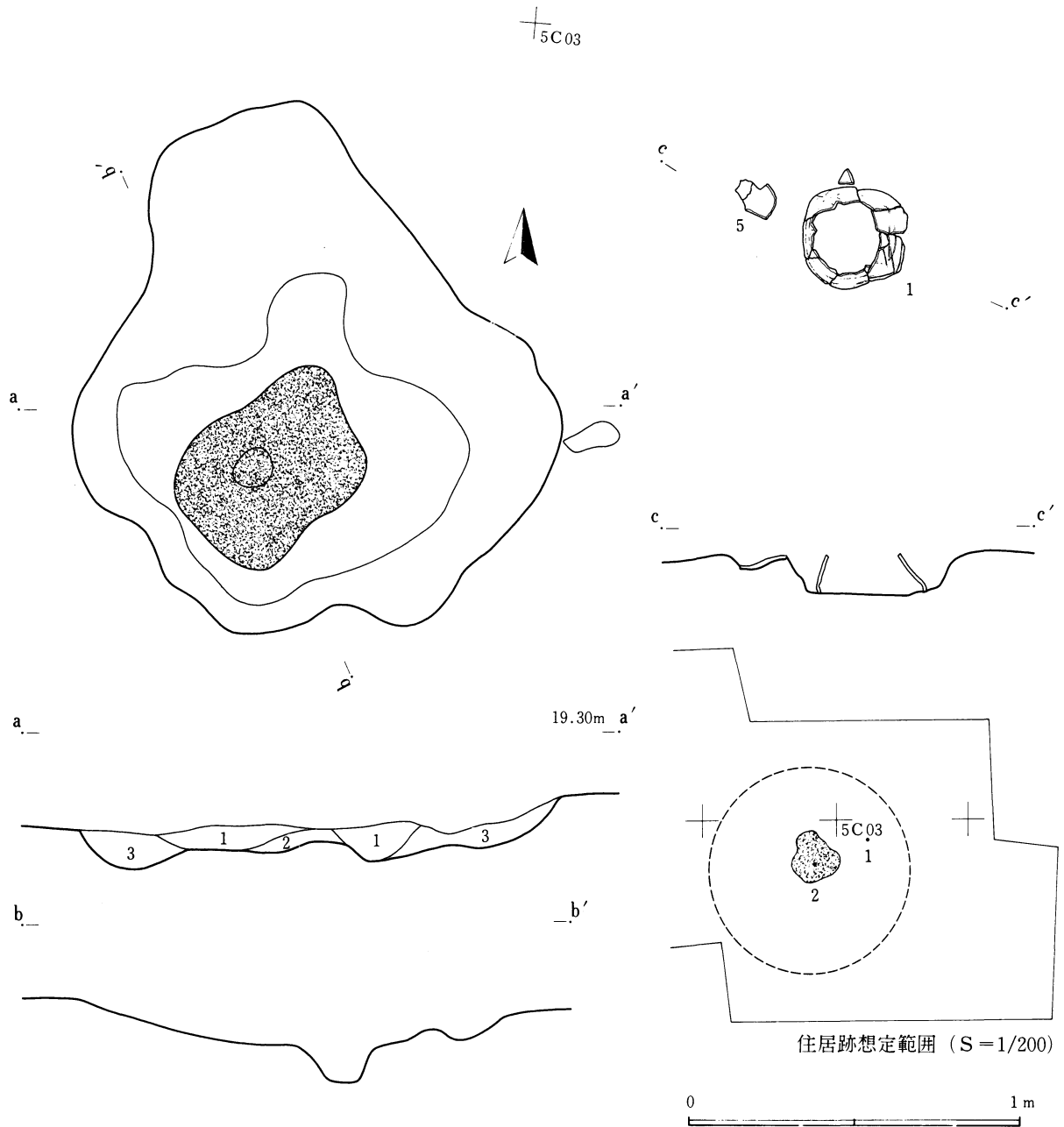
炉内の土層は3層に分かれる。1層 暗褐色土(若干の焼土粒を含む)、2層 赤褐色土(焼土粒・塊や炭化材片を主とする)、3層 暗黄褐色土(ソフトロームを主とし、少量の焼土粒を含む)である。

炉の東北東1.2mの位置に倒立した状態で深鉢形土器(1)が出土したが、掘込みまたは窪みは見られない。このほかにも炉跡を中心に半径3mほどの範囲に、土器や石器が発見されたが、高低差はほとんどなかった。

竪穴住居跡の可能性が高いと判断し、再三にわたり精査を実施したが、壁はもちろん、床面や柱穴など手懸かりとなる痕跡はまったく認められなかった。



第6图 1·2号陷穴·3号土坑

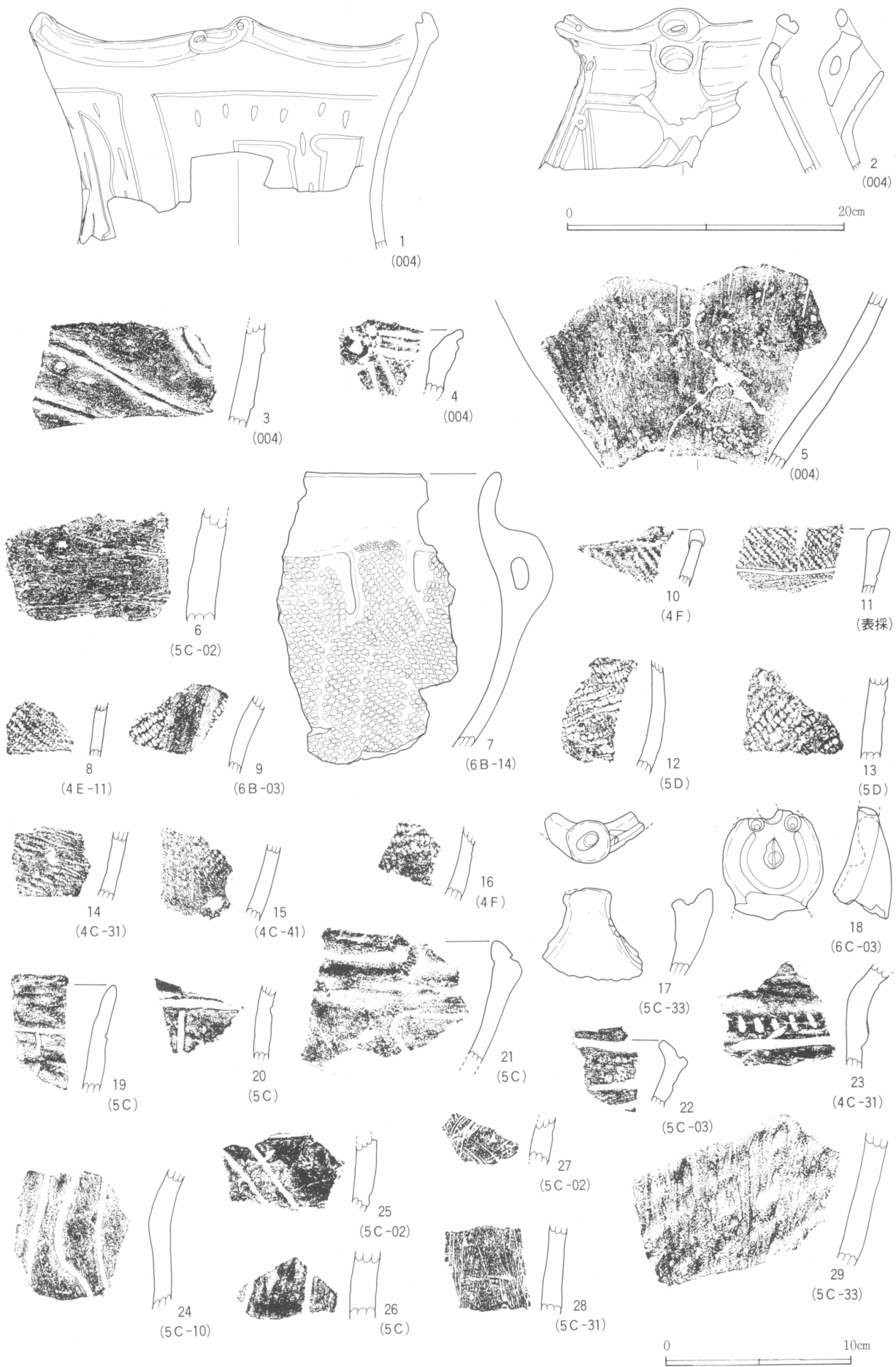


第7図 4号炉跡

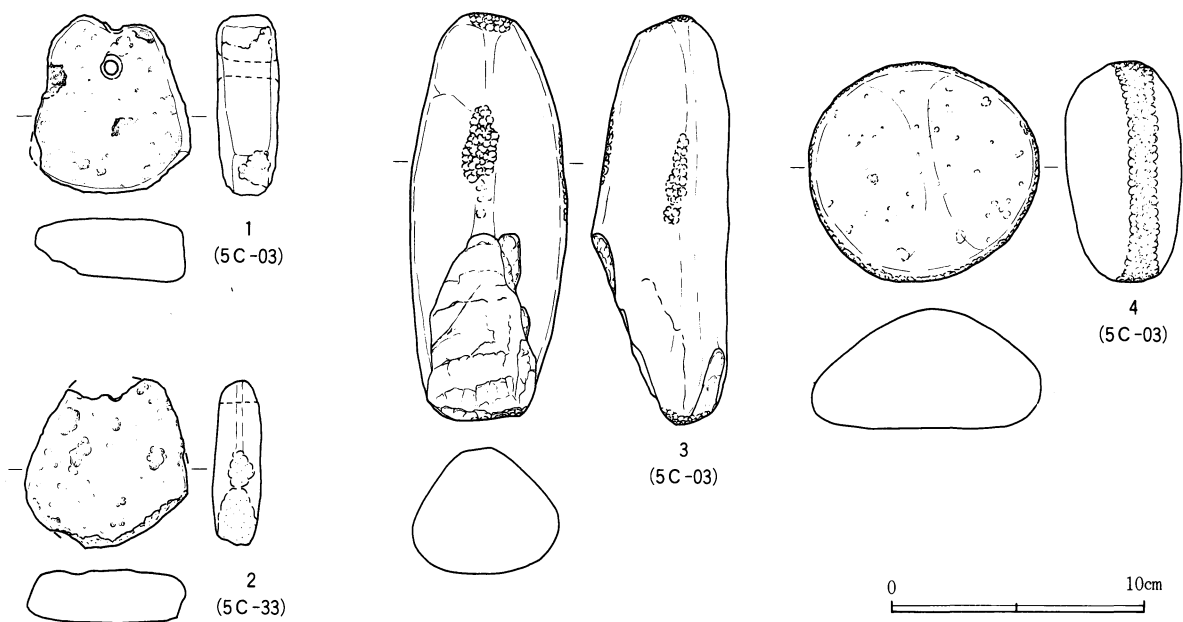
(2) 遺物 (第8・9図 図版2・3)

ア. 4号炉跡出土遺物

1は称名寺式の深鉢形土器である。口径は30cmほどである。頸部が軽くすばみ、器高の高いプロポーションになるもので、太い沈線の区画内に列点状の短沈線を施している。波状をなす口縁の頂部には円形刺突文・沈線文を伴う貼付文が見られる。2は堀之内式土器の注口土器で、隆起線と沈線により襷掛文を構成する文様をもつ。口唇部には、沈線と貫通した孔が見られる。器面の剥落が多く、あまり保存状態が良くない。3は微隆起線の施文されたもので、加曾利EIV式土器になろう。4は2とほぼ同様の意匠のもので堀之内式土器である。5は深鉢形土器の底部に近い部分で、器面が磨かれ上部には沈線文が見られ、1の胴下部の可能性が高い。



第8図 繩文土器



第9図 縄文時代石器

イ. グリッド出土遺物

縄文土器 6は器面に擦痕があり、繊維を少量含む土器で縄文早期の子母口式とみられる。7は幅広の外耳状の把手をもつ土器で、頸部の境に微隆起線、以下に縦位施文の斜縄文が施文されている。加曾利E IV式土器で、広口の壺ないし甕形の土器になりそうである。8から16は縄文施文の土器で、中期末から後期にかけてのものであろう。9は縄文が縦位施文で、かつ磨消帯が見られものである。10・11は口縁部であり、10には小突起、11では縄文を沈線で区切るモチーフが見られる。17は波状口縁の先端突起の部分で、口唇にも円形刺突文、沈線文が見られる。器面が荒れているため不明瞭だが、外面に縄文が施文されていた可能性がある。18は円形をした把手部分であり、円形刺突文・沈線文が施される。また、先端部には孔が貫通している。19～26は沈線文の施文されているもので、大部分は称名寺式土器とみられる。27・28は条線文の施されるものである。29は無文の土器で、縦ヘラなでされているため、底部に近い部分とみられる。

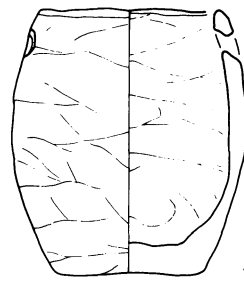
石器・石製品 1・2は軽石製の浮子である。外面を擦って、涙滴形に近い扁平な台形に成形し、上端部に穿孔して仕上げたものである。1は長さ7.0cm、現存幅6.1cm、厚さ2.4cm、重さ24gを測る。2は上下が欠損しているが、1と同様の形状になるのもので、厚さが2.0cmとやや薄いほかはよく似ている。3は長楕円形のホルンフェルス素材としている敲石である。長さ15.9cm、幅6.2cm、厚さ5.4cm、重さ720gを測る。一端が幅が広くなり、節理面で剝離して石斧の刃部様になっている。両端部には顕著な敲打痕が認められ、側縁にも一部敲打された跡がある。また外面に光沢を伴う軽い摩滅痕がある。4は磨石で、平面形はほぼ円形であり、片面が平坦で他面が球面に近い。安山岩の河原石を素材としている。径は8.5cm×9.1cm、厚さ4.5cm、重さ470gを測る。側面に摺り痕、両面に軽い摩滅痕が見られる。

4. 古墳時代以降

(1) 遺物 (第10図・図版2)

1は、試掘の際に4号炉跡付近から出土した小形土器である。体部の1/3は欠損するが、口径4.5cm、底径3.6cm、器高6.8cmで最大径は6.1cmを測る。成形は底部と体部を別個に作り、底から2cmの部分で接合している。器肉を薄くするためか、内外面ともかなり強いヘラケズリを施したようで、最終調整は不整方向の細かく、丁寧な手持ちヘラケズリ仕上げである。底部は8mmと厚く、内面は指頭ナデ、外面はやや粗いヘラケズリで、円を描くように調整される。口唇の内外は強い横ナデが施される。口縁部直下には径7mmの焼成前穿孔が2か所に認められる。これは外から斜め上方に穿たれ、左右向かい合った正確な位置に配される。胎土は黄褐色で、多量の砂粒を含み、焼成は良好である。内外とも赤褐色を呈し、体部の2か所に黒斑が広がる。

以上の特徴から土師器と考えられ、形態は「蛸壺」に似かよっているが、本遺跡からはほかに一片の土師器も見つかっておらず、時期や用途は不明と言わざるを得ない。



第10図 小形土器
(S=1/2)

IV まとめ

先土器時代の遺物として、ナイフ形石器があげられる。流山市内でも、近年当該期遺跡の調査が多くなってきているが、本遺跡を含め、ナイフ形石器がまとまって発見される例は未だない。

縄文時代の遺構のうち陥穴としたものは、遺物は検出できなかったが、その形状・土層の観察から早期末から前期のものと考えられる。4号炉跡は大形の不整円形の地床炉である。確認面は東から西へ斜めに削られており、再三の精査にもかかわらず、柱穴などの痕跡もないので、ここでは炉跡と呼称した。

縄文土器は、一部を除き中期末から後期の所産である。特に1は4号炉跡に近接し、また2は炉内に散在しており、遺構の年代を示す資料である。

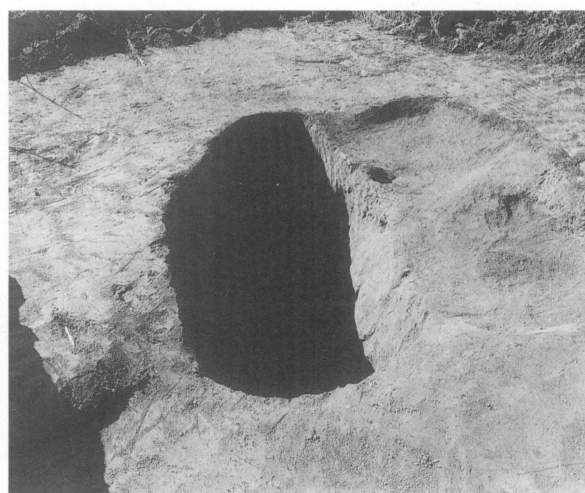
図版 1



1. 調査風景



2. 1号陷穴



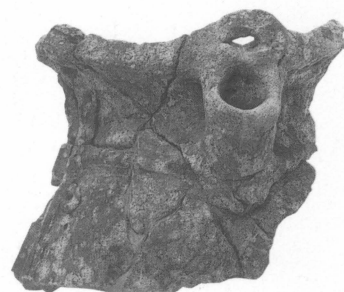
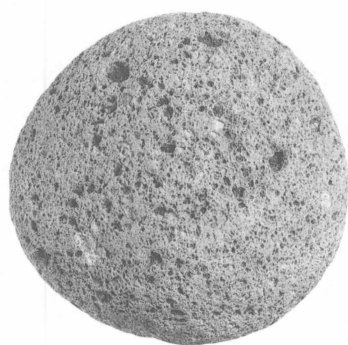
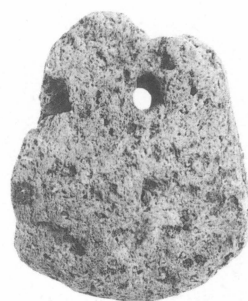
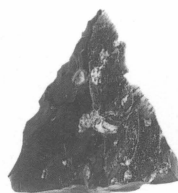
3. 2号陷穴



4. 4号炉跡



5. 縄文土器(1)出土状況





報告書抄録

ふりがな	ながれやまはなやまひがしいせき							
書名	流山市花山東遺跡							
副書名	流山郵便局庁舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第294集							
編著者名	糸川道行 他							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2						Tel 043-422-8811	
発行年月日	西暦1996年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はなやまひがし 花山東	ながれやましにしはつし 流山市西初石4丁目 1,423-1	220	020	35度 52分 31秒	139度 55分 11秒	19960105～ 19960215	5,837	流山郵便局 庁舎新築工 事に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
花山東	包蔵地	先土器時代			石器・礫			
		縄文時代	炉跡 陥穴	1か所 2基	縄文土器(後期) 石器(磨石・浮子等)			
		時期不詳	土坑	1基	小形土器			

千葉県文化財センター調査報告第294集

流山市花山東遺跡

流山郵便局庁舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成8年9月30日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 郵政省 関東郵政局

東京都千代田区大手町2-3-2

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 エリート印刷

千葉市中央区市場町6-8